

巖 島 の 植 物

抜 萃

◎ 堀川芳雄：巖島の植物

広島県天記調報才五輯（1942）

187 ~ 212

1. 巖島の概観

波濤かなる瀬戸内海に浮かぶ無数の島嶼中巖島は日本三景の一つとして、古来風光の美を喧伝されてきたがこの島に自生する植物及び島の一部に天然のまま保存されてきた森林群落も亦夙に斯界に有名である。嘗つて大正2年近世植物分類地理学の泰斗として有名なドイツ人エンゲルマン博士が本邦に幸朝した際、巖島の植物を具に調査したる後、「余は能う得べくんば一生玄に死せんことを希う」と、しみじみ述懐し多種類の植物相に感嘆これを久しくしたのも洵に当然のことである。現在み山頂上附近及び北斜面特に大元公園を中心として発達せる森林群落は、今なおよく往古の姿を残し我が国暖帯標準林としての代表的な原始林であつて既に昭和4年「み山原始林」の名を以て天然記念物として文部大臣の指定を受けている。又植物地理学的観点より、巖島の植物を見れば本州西南部の植物区系(フロア)の特徴を具備せると共に島としての特種なる植物区系の特質をも併せ具現せることが観察出来るのである。更に又神慮として多年保護されて来た多数の鹿が植群に与えつつある影響も決して尠くはなく、その結果も亦明瞭に観察し得るのであつて恰も天然の手になる一大実験が本島に於いて不斷に続行されているとも称することが出来よう。かかる諸点より巖島の植物を見ると、津々として汲めども尽きぬ興味を喚起されるはけだし本委員のみではないであらう。

巖島は略々短形をなせる一島嶼にしてその長軸は北東から南西に向い、長さ約10km、巾約4km、総面積は3127町歩に及ぶ。島の中央には長軸に沿う一山脈があつて、み山(540)岩船、駒ヶ林、の三主峰が屹立し海上よりこれを望めば、島全体が恰も一山塊の觀を呈す。斯くの如く巾狭くして山系比較的高きを以て山の傾斜は著しく急峻にして処々基岩を露出し又は絶壁となれる処も少くない。これらの山脚が直に海岸に接するため平地は極めて少く、又瀬戸内海の波が常に静穏なるため砂浜の発達も亦少い。現在巖島町、杉の浦農家及び水田の占める平坦地は數次に亘る埋立によつて得られたるものにして元來の平坦地は殆んど絶無といつてよいのである。巖島の地質構造は頗る簡單にして全島花崗岩よりなり、その風化による粗砂を多量に混ざる砂質表土が森林を支えている。従つて土壌の水素イオン濃度は全島を通じ酸性に傾いている。(み山頂上附近ツガ林内5.2、仁王門附近5.0、幕岩附近5.6、大元公園モミ林内5.2、紅葉谷5.1、大元河口(河砂)5.4の値を示している。)林内に於ける腐植質の堆積は山勢の緩なる所以外は一般に少い。北斜面は南斜面に比し、気温風向に多少の差がある

うが、水量豊富にして樹木の生長は南斜面に比し旺盛である。

旧藩時代においては巖島は代々安芸藩に属し島全体が神地として特別の保護を(宮島奉行、元締役、帳元を設け御山方三人木守役十二人を置く)受けていたのであるが、明治維新に至り薩藩豊原と共に国有林、公園地、神社境内、民有地に區別せられ爾后国有林は広島県の所管に属したが明治19年農商務省の直轄となり越えて同19年巖島神社の保管林となり再び農務省に直轄せられ、その後一部が前述せる如く文部大臣の指定を受け現在に立到つたものである。

その後山火事の厄に遭いたること更に頻繁にして古老の言によればその最大のもは七日七夜燃え続けたといひ又一日に三ヶ所より火の手あがりたることもあつたといひ。火災の如何に頻繁なりしかは巖島町の各戸に今尚お山火専用の長柄を附せる鉋の櫛えあることよりも容易に想像出来る。加之前後二回の兵火にもかかつてゐる。為に往古の原始林の既に消滅し去つた部分も島の殆ど全面に及んでゐるのであるが、その跡地にはアカマツ林が発達して次々に二次林を形成するに至つてゐる。而してこの二次的アカマツ林も最早相当なる年令に達せる部分が多い。

旧藩時代に於ては巖島神社は薪炭材の伐採を公許されその売却金を以て神社の維持費発展費に充て神社修理の用材は必要に応じて随時伐採していたのである。国有林が神社の保管林となつた後も下草(主としてウラボシの莖)松茸等の副産物採取の権利が与えられた。又薪炭材は船による他よりの供給に俟つを以て山中の枯枝落葉は住民により採取される。

従つてかくの如き人為的要素が古來植群に与え来つた影響も亦当然少くはないであらう。因に宮島細工として年々多量に産するしゃく子、枕物、刺物類の材料には本島産のものは全く使用されていない。

2. 植群の大要

現今巖島全島を被り森林を海上より望見すると殆んど一様の相觀を呈する如くに感ぜられるが一度足跡を島上に印して、道を大元公園より登山路に選べば數種の植物群落を區別することが特に容易であり、み山頂上に至る間に現はれる垂直分布の変化に多少とも気付くであらう。植物生態学の見地よりすれば巖島の森林は次に示す四種の群叢に大別されるがその四種を通じて次の特徴を具えている。即ち、植群を構成する主要植物はモミ、ツガ、アカマツ、等の針葉樹を除けば殆

んどその全部が常緑闊葉樹なること、この種数は限られた少数にして、各群叢に共通して出現する樹木の多いこと、林床に生ずる草本が極めて少く為るに林床は殆んど裸地の觀あること、木生草本の多種多量を有すること等がそれである。

今各群叢とそれを構成する主要な植物の垂直的分布を圖示すると次表の如くである。(省略)

1. クロマツ群叢

本群叢は島の周縁に於ける砂浜に発達せるものにして、巖島附近では真の松原、杉の浦等に於いて容易に見ることが出来る。主要木は勿論クロマツではあるが杉の浦では若干のアカマツを混生している。同地に於て代表的な部分を選び10米平方の方形区を設けて出現の割合を検せるに全株数は14にしてそのうちクロマツ9、アカマツ5、であつた。目通り周囲はクロマツは最大16.60m、最小8.40m、平均12.60m、アカマツは最大12.30m、最小3.20m、平均6.70mであつた。本群叢は人工の加はるること多く、下生植物は現今全く発見し得ない。クロマツは土壌の表層近く多数の被根を延びているため砂粒の流失を防ぐのに役立つことが江の松原でよく観察することが出来る。海岸近き陸上にはクロマツ群叢(往々アカマツを混生)を越え見出し得るが、かかる場所にはアセビ、アラカシ、ウラジロカシ、シヤンソング、コバノミツバツツジ、イトススキ、ミツデウラボシ等の下生植物を有している。その内アセビが最も多く下生植物の状態は海岸近くに発達せるアカマツ群叢と大差がない。島の南部及び西部の砂浜には本群叢の発達は可なり著しく、下生植物としてコケセンボンギクを有する点は一特徴である。

2. モミ群叢

モミをオ一層樹木とするモミ群叢は大元公園を中心として最も見事に生育し此処では海浜のクロマツ群叢を直接連続して発達する。尚ほ大聖院、紅葉谷にも本群叢を見ることが出来る。本群叢は海浜に於ては僅々約50mにて最早その発達を止めアカマツ群叢は又ツガ群叢によつて置換されている。本群叢の好む環境は谷間若しくは平坦地等の土壌湿度の常に高さ地であつて乾燥せる尾浜上には発達しない。

大元神社附近の一地点に10米平方の方形区をとり群叢の構造を分析せる結果は次の如くである。

	被度	被度
オ一層	モ 5	

オ二層	カ	ヤ	5	ミミズベヒ	5
オ三層	イヌガシ		4	カ	ヤ
	シキミ		+	シロダモ	+
	ヤブニツケイ		+	ミミズベヒ	+
オ四層	アリドウシ		1	アセビ	+
	シキミ		+	イタビカヅラ	+
オ五層	省	略			

而してこの区内に包含されるモミは二株にして根廻り周囲は夫々360cm~3980cmに及ぶ大木である。根廻り305cmの一株が173年を経過せる一例(同所附近にて測定)より見てこれらのモミは200年以上の樹令を有するものと認められ本群叢の老令林を代表すると考えられる。オ二層におけるカヤ及びミミズベヒも注目し得る。更に大元公園の奥に於て他の一カ所を選び分析したが、前記の部分より若令林にして且つ各種の直径級を有し10米平方に包含される株数は平均5.5株(目通り周囲最大20.20m、最小2.10m、平均9.50m、少量のアカマツを混生)オ二層は常緑闊葉樹木(アセビ、シキミ、イヌガシ、シロダモ、ヤブニツケイ)の発達は極めて良好である。この二カ所の測定区に於ては共に地床層の発達は極めて貧弱であるがモミ、シキミの種苗を有する点は興味深い。

3. ツガ群叢

ツガを主要要素とするツガ群叢はみ山頂上附近に特に著しい発達を示す。本群叢は現在主としてこの附近に限られているが、往古に於て前述のモミ群叢と連続してその上部に発達していたと想像される。オ一層樹木はツガを主とするは勿論であるがその他にモミ、スギ、カボノキの樹木を混生する。求開持堂前に20米平方の方形区を設けて群叢の構造を調査して次に示す如き結果を得たが区内に含まれるツガは9株(10米平方では平均2.25株)にして目通り周囲最大26.60m、最小14.00m、平均19.60mであつた。

	被度	被度
オ一層	ツ 5	スギ +
オ二層	サカキ +	イヌガシ +
	スギ +	
オ三~四層	モ 1	ヒサカキ 1
	ウラジロガシ +	イヌガシ +

シ キ ミ + ヤブツバキ +
 ス キ + ア セ ビ +
 クロバヒ +

4. アカマツ群叢

アカマツ群叢は屢次に及ぶ火災により破壊された天然林の跡地に発達し来つたオ二次林であつてその占める面積は最も広い。み山の頂上に立つて島の高斜面を術撤すると、旺盛に生長しつつあるアカマツの一斉林の樹冠を一望のもとに取めることができる。しかし一歩その林内に踏み入ればアカマツの下には昼なお暗い程鬱蒼と繁茂せる常緑闊葉樹が密なる下生植物層を形成せるのに一驚させられるであろう。かかるアカマツ群叢の模範的な一部を仁王門附近に選び、その構造を分析せる結果は次の如くである。

	被 度	被 度
オ一層	アカマツ 5	
オ二層	シキミ 5	イヌガン 3
	ヤブツバキ 3	サカキ 2
	リヨゴ 1	
オ三層	ヒサカキ +	ヤブツバキ +
	サカキ +	
オ四層	イヌガン +	シキミ +
	ヤブツバキ +	シロダモ +
オ五層		
藤 本	テイカカヅラ	

オ二層即ち亜喬木層を構成する樹種はツガ群叢及びモミ群叢にては概ねオ三層に止つていて亜喬木層には発達していない。元来アカマツは著しい陽地植物で山次第跡の如く多量の日光を受ける地では容易に発芽して次代の森林を形成するが本群叢に於ける如く下生植物が鬱積して林床に侵入する日光を遮る度の大なる処では発芽発育の能力はない。従つてかくの如きアカマツ群叢は永續するものではなくやがて常緑闊葉樹にその席を譲ることは想像に難くはない。かゝる更新途上にあるアカマツ群叢は全島に亘つて見られるが特に西側斜面に於いて見盛である。北側斜面にてはアカマツ群叢の下生は発達程度未だ低く、亜喬木の高さに達せざる部分が少くない。低地に於てはアセビ最も優先し、稍高所からはヒサカキ代

つて優位を占める。その他、ソヨゴンキミ、ウラジロガン、イヌガン、ネチキ、ウリヘダカエデ、サカキ、シイ、ヤブツバキ、ミミズバヒ、ツロダモ、ネズ、ヤマモモ、アラカン、カラスザンショウ、コバノミ、ツバツツジ、サルトリイバラ、テイカカヅラ等の下生植物を見る。ウラジロ科に属するコンダ及びウラジロは本群叢内の乾燥せる部分を好んで大小の集団を形成するが両者が混生することのないのは興味が深い。

巖石附近には舊てウラジロの大群叢があつたが昭和14年の暴風で殆んど全滅に類するに至つた。又本群叢にタマミズキを混生すること。カギカヅラを有することのあるのは特記に値する点である。尚お西側斜面の低地にては下生としてヤブツバキが特に多い。

藤 本

巖島に於て藤本の多種多量なるのは巖島植群の一特徴たるを失わない。その殆んど全てが生長頗る旺盛にして高く喬木の樹幹にまで達している。テイカカヅラ、カギカヅラ、マツブサ、イワガラミ、ウラジロサルナン、ミツペアケビ、ヤマイバラ、キジヨラン、ヤブイバラ等を算えることが出来る。これ等の藤本は湿潤な谷間に特に多く大元公園よりの登山路に沿う一部、地獄谷（白糸滝の上流）等に多量に見出される。

岩石上に着生する植物

巖島は地勢概ね急峻にして、岩壁の露出する部分が多く、かかる岩上へのみ生ずる植物を見ることが出来る。駒ヶ林附近、み山頂上附近には特に多い。即ちナガバノヤマグルマ、マルバウツギ等の木本、セキコク、マメズタラン、ムギランの如き蘭科植物、カタヒバ、ホソバノケケンノブ、ヒトツバ、シシランの如き羊歯植物、イハタケ（地衣類）等がその著しい例である。明治11年発売修正巖島宮路の枝折にも蘭として石蘭、柔蘭、鶯蘭、岩千鳥蘭、孔雀蘭の名があげられ、岩壁については「御山千仞の谷なる巖壁に生ず。採る者甚だ危し」と出ている。

岩船の頂上附近に日生するコウヤマキも亦岩塊多き尾根をその環境とする植物である。ネズ、ヒノキにもその傾向が見られ共に尾根筋の処々に散見される。ウラジロイワガサ（ミヤジマシモツケ）も亦同様岩塊地を好む植物の如くである。

幹に着生する植物としては頂上附近のクラモン、ベニカヤラン、シノブ、山麓のカヤラン、ビウダツダ等が著しい例である。

湿地の植物

杉の浦、小名切谷等の如く埋立地にては谷川がせき止められたが為に小湿地

が出現せる所が数ヶ所存在する。かゝる湿地に於ては満水中にヒトモトススキ、シチタウイ、フトイ等の小群落を生じ低湿地にはハヒチゴザサ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ハンケンヨウ、ミスゴケを生ぜしめている。

海岸の植物

ノロマソ群落は海浜の砂眼を占める群落として存在するが、海浜地帯に多き植物としてカンコノキ、ハマクサギ、クズドイゲ、ダイヤモンドチヂミ等が見られ、その中ダイヤモンドチヂミは海に面する崖上に一帯を形成して出現することが多い。須屋浦の砂浜に於ては、ハマカウ、イハダイゲキ、ハマニガナ、等の海浜植物群落を見ることが出来る。尚、ハマサジ、ハマゼリ、ハマスゲ、ハマソンの如き塩生植物の小群落も各所の海浜に見られる。又大元公園、町役場の裏手に於てクスの大森が見られることは往古海岸にクス群落の発達していたことを思わせるに十分である。

アマモ群落

アマモ（リュウグウノオトヒメノモトイノキリハズ）はヒルムシロ科に属し海中にのみ生ずるリボン状の種子植物であるが、巖島の周縁をめぐり低潮線附近の海水中に叢生してアマモ群落を形成している。又岩礁には、ウミトランポ、ネバリモ、フクロノリ、ヒジキ、ツルツル等の多種の海藻が附着してそれぞれの群落を形成している。須屋浦に近き、板岩のヒジキ群落は特に見事であり、巖島神社前に入江にはオゴノリが多数生じている。

3. 植 群 と 鹿

巖島に棲息する獣類としては、鹿、猪、アナグマ、イタチ等が数えられているが、植群と関係深きは無蹄鹿が唯一である。猪は主として人跡の少ない南斜面に棲むが頭数も少く大した影響はない。鹿は現在約400頭と称せられているがこの鹿が植群に与え来つた影響は極めて著しいものがある。鹿の起原は明瞭でないが（一時北海道産の鹿5、6頭を移入した事あり）鹿が神社、町、島の何れにも属していない点から見て元来巖島に野生していたものがいつのまにか神鹿として保護を加えられ次第に繁殖し来つたものとするのが最も妥当であろう。鹿は近年島の南斜面には全く棲息せず（或事情のため）専ら北斜面、特に巖島町の附近に集合しているがその足跡は北斜面全面に及んでいる。

400頭という頭数はその棲息区域に比して頗る多いのであつて従つて食物に不

足を来し全島の植物はその著しい食害を被つている。併し乍ら現在の植群の状から判断すると刺針を有するものは（カンコノキ、クズドイゲ、アリドウソ、ホウロクゴ、カラスザンソヨウ、イヌザンソヨウ等）臭氣を有するもの（ハマクサギ、シキミ、イヌニゴマ、カラスザンソヨウ、イヌザンソヨウ等）有毒なもの（アセビ、ハスノハカツラ等）この害を免れ次第に繁茂を加え来つたことは想像に難くない。

巖島の植群に於て地床の草本植物が極めて少いのは島嶼たるの地理的条件に、つて元来その種類に乏しいことと、上層の遮光度大なることと相まつて鹿の捕食の害もその大なる原因となつていよう。

阿蘇全華山は巖島と殆んど同一の条件を具えている島であるが、阿蘇島が極めて近似せる植物景観を有する点に頗る興味深く遺憾の事情を物語つて余りあるものである。即ち鹿が棲息して植群がその捕食に委せられている点、島の大きさ、本土との距離等に於て巖島と略々同様である。全華山の植物群落は主としてブナ群落より構成されているがその下生植物として、ヘナヒリノキ、ハンゴンソウの如き、鹿の不嗜好植物がよく繁茂している点、地床植物の甚だ少き点等は阿蘇島その觀を全く一にしている。

更に興味深きは全華山には多数の蕨が群生しているのであるが、巖島に於ても近年まで（明治20年伝染病のため全滅す）多数棲息していた点である。この阿蘇島の植群を更に精密に比較研究すれば、幾多の興味深き事實を発見し得るであろう。

4. フ ロ ラ の 考 察

巖島に自生する羊歯植物以上の高等植物は現在まで知られている限りでは、136科、377属、619種に達する。その内訳は、

羊歯植物	10科	41属	72種
裸子植物	8科	9属	10種
双子葉植物	97科	234属	394種
単子葉植物	21科	93属	143種

である。又木本植物214種の内針葉樹は10種、常緑闊葉樹は69種、落葉闊葉樹は135種である。この数字を率に比較すると落葉樹が最も多い種であるが量的に多いのは常緑樹と針葉樹であつて落葉樹は比較的少ないものとしては、ウツハダカエデ、ネチギ、コバノミツバツツデ、カマツカ等を挙げ得るに過ぎない。

次に羊歯植物関係 (pteridophyta - Quo - tient) を求めると $\frac{72 \times 25}{5.47} = 3.28$ 即ち約 3.3 となる。この数値を本州の 2.1、四国^①の 3.1、九州の 3.1 に比すると本州は勿論四国九州のそれよりも高く又広島県の 2.6 よりは遙に高い値である。即ちこの事實は玄に詳論する紙面はないが、要するに巖島が広島県全般或は四国、九州よりも気温、雨量が植物生活に好適であるとするよりもむしろ島嶼たるの特殊条件に基因するものであると考えられる。

一般に島嶼は本土との間に多少の海洋を狭むが故に植物伝播の機会がそれだけ少く従つて島嶼に分布する植物は本土のそれに比して何程か欠けるところのあるのが通例である。巖島もこの例に洩れるものでなく対岸の本土に極めて普通に産する種類にして巖島に全く自生 (人為的に移植せしものを含まず) を見ないものが多いのである。若干の例を挙げると、木ではクリ、アベマキ、クスギ等がその著しいものであり、木土にて到るところに産するササ、タケ類も巖島には自生していない。その他羊歯類草本類に至つては、その例が甚だ多い。しかしこれは既に述べ来た如く、単に本島の地的条件のみならず島の孤立及び人為的濫伐が同じ方向に向つて働きつつあることを考慮に入るべきは勿論である。如何なる種類が欠けているや、又如何なる割合に於て欠けているやは興味ある一問題であつて、この方面に於ても巖島は好適の研究地であると信ずる。

巖島に自生する植物種類誌

(緑藻植物門)

アヲサ科

アオノリ、アヲサ

ヒトヘグサ科

ヒトヘグサ

クロオレビス科

スミレモ

シオグサ科

シオグサ

ホソエガサ科

ホソエガサ

ハネモ科

ハネモ

ミル科

ハイミル、ミル

(輪藻植物門)

シヤジクモ科

オニフラスコモ

藻蓴植物門

クロガンシラ科

ヨツデクロガンシラ、マタザキクロガンシラ

アミジグサ科

アミジグサ

ネバリモ科

ネバリモ

モズク科

イシモズク

ニセモズク科

ニセモズク

モズク科

モズク

カヤモノリ科

フクロノリ、ハバノリ、カゴメノリ、カヤモノリ

ツルモ科

ツルモ

フウグス科

ヒジキ、トゲモク、ヤツマタモク、マメダワラ、ウミトラノオ

紅藻植物門

ウシケノリ科

アサグサノリ

カワモブク科

カワモズク

テングサ科

テングサ、ヒメテングサ

リュウモンソウ科

イソムノモドキ

サンゴモ科

カニノテ、サンゴモ

ムカデノリ科

コメノリ、ムカデノリ

イトフノリ科

イトフノリ

フノリ科

フクロフノリ、マフノリ

イバラノリ科

イバラノリ

オゴノリ科

シラモ、オゴノリ、カバノリ

オキツノリ科

オキツノリ

タルス科

タオヤギソウ

ワツナギソウ科

ワツナギソウ

イギス科

フタツガサネ、ヨツガサネ、イギス、エゴノリ、ケイギス、ケカザンダサ

タジア科

イソハキ

フジマツモ科

オホソフ、カギソフ、ミツデソフ、ジヤバラノリ、イトクサ

(菌植物門)

(子囊菌類)

テングノメシガイ科

ヒメカムリタケ、タマテングノメシガイ、ツキンタケ、カムリタケ

ノボリリヨウ科

シヤグマアミガサタケ、アシボソノボリリヨウ

チャワンタケ科

キンチャワンタケ、オオタチャワンタケ、アラゲコベニチャワンタケ

肉坐菌科

タンボタケ

担子菌類

キクラゲ科

キクラゲ、アラゲキクラゲ

シロキクラゲ科

ヒメキクラゲ、シロキクラゲ

滴菌科

フダリタケ、ツノマタタケ

イボタケ科

クロウスタケ、ウラジロウロコタケ、タチウロコタケ、キウロコタケ、アメウロコタケ、チ
ウロコタケ、チヤイボタケ

ハハキタケ科

ムラサキハハキタケモドキ、チキハハキタケモドキ、カレエダタケ、キハハキダケナギナタ
タケ、キソウメンタケ、ムラサキナギナタタケ

コウタケ科

コロハハリタケ、マツカサタケ、シシタケ、シロカノシタ、イヌチヤハリタケ、チヤハリタ
ケ、ニクウスバタケ、ウスバシワイタケ、コガネウスバタケ

サルノコシカケ科

イロガワリ、アミタケ、ヤマドリタケ、ヌメリイグチ、アワタケ、ヒトクチタケ、ワヒダタ
ケ、シダレタケ、ハチノスタケ、カンゾウタケ、エビウラタケ、カイガラタケ、キカイガラ
タケ、シワタケ、アミスギタケ、アオソメタケ、ニンギヨウタケ、コウモリタケ、クロカワ
アズマタケ、カイメンタケ、シワイタケ、ニクケイタケ、ヒロイタケ、ウチワタケ、オウネ
ンタケ、カワラタケ、ヒメオニイグチ、オニイグチ

マツタケ科

マツタケ、タマゴダケ、コタマゴテングタケ、シロウロコツルタケ、ツルタケ、マツタケ、
ナラタケ、アンズタケ、ウスダケ、オオキツネタケ、ウラムラサキ、キツネタケ、マツカサ
ツエタケ、アマタケ、ツエタケ、ヒトヨタケ、マダソヒトヨタケ、アラブシメジ、シイタケ
アギタケ、クギタケ、アカヤマタケ、シロヤマタケ、アカタマベニタケ、ヒロイガサ、イタ
テタケ、ニガタリタケ、アセタキモドキ、アカモミタケ、ハツタケ、ツチカブリ、コキハダ
チタケ、チチタケ、マツオフジ、キツネノハナガサ、カラカサタケ、シロオニタケ、オチバ
タケ、カレバタケ、ハリガネオチバタケ、アシナガタケ、ヒナノガサ、マダソタケ、サイキ
ヨウガサ、ヒラタケ、イヌセンボン、ムラサキハツタケ、ドクベニタケ、コベニタケ、クロ
ハツタケ、オオベニタケ、ハツタケ、(アイタケ) スエヒロタケ、シメジ、キンメジ、ムラ
サキシメジ、サマツモドキ

スツボンタケ科

キツネノタイマツ

シヨウロ科

シヨウロ

ボコリタケ科

ツチガキ、エリマキツチグリ、クチベニタケ、ノウタケ、マダダシゴ、キツネノチヤブタロ
コツブタケ

チヤダイゴ科

ツネノチヤダイゴケ

(附地衣類)

モジゴケ科

モジゴケ

イボダイゴケ科

ゴフンゴケ

モツレノリ科

イワノリ科

コナアオキノリ、ウスバアオキノリ、ゴバノアオキノリ

ハナビラゴケ科

コナカワラゴケ

ヨロイゴケ科

エビラゴケ、チヂレヨロイゴケ、ヤマトエビラゴケ、チヂレカブトゴケモドキ、チヂレカブトゴケ、カブトゴケモドキ、ニセキンブチゴケ

ツメゴケ科

ウラミゴケモドキ

ハケゴケ科

トゲシバリ、ジヨウゴゴケ、ハナゴケ

イワタケ科

イワタケ、ヒメイワタケ

ウメノキゴケ科

キウメノキゴケ、ホソバウメノキゴケ、センシゴケ、マツグゴケ、カラグサゴケ、ウメノキゴケ

サルオガセ科

ヨコワサルオガセ、ウツロヒゴケ

ムカデゴケ科

クロゲウラシロゲジゲジゴケ、ウラキゲジゲジゴケ、ゲジゲジゴケ、クロホシ

(有茎植物門)

(苔蘚植物)

(苔類)

チンガサゴケ科

ジンガサゴケ

ゼニゴケ科

ジヤゴケ、ヒメジヤゴケ、ケゼニゴケ、ハナゼニゴケ、ゼニゴケ、アズマゴケ

スデゴケ科

クソノヘスジゴケ、コバノミスゼニゴケ

フタマタゴケ科

フタマタゴケモドキ

クモノスゴケ科

マキノゴケ、クモノスゴケ、ヤハズゴケ

ミスゼニゴケ科

ウスバゼニゴケ、ホソバミツゼニゴケ、エゾミツゼニゴケ

チヨウチンゴケモドキ科

チヨウチンゴケモドキ

ウロコゴケ科

オオウロコゴケ、フチウロコゴケ、ヒメトサカゴケ、コハネゴケ、マルバハネゴケ

ムチゴケ科

シロムチゴケ、オオムチゴケ、トキホラゴケモドキ、ハイダウロコゴケ、フロロヤハネゴケ、フチゴケ、カタハゼニゴケ

ケテタゴケ科

マツバウロコゴケ、トゲアイバゴケ、ビロウドウロコゴケ

ヒシヤクゴケ科

ムラサキヒシヤクゴケ、ウニバヒシヤクゴケ、ノコギリフタエウロコゴケ

ケビラゴケ科

ヒラマルバウロコゴケ、コウヤマルバウロコゴケ、ミドリケビラゴケ、オオケビラゴケ

クラマゴケモドキ科

クラマゴケモドキ、トサクラマゴケモドキ、チヂミカヤゴケ

ヤスデゴケ科

ホソヤスデゴケ、アサフルラニゴケ、シタレヤスデゴケ、マルバシタレヤスデゴケ

クサリゴケ科

ヤマトチヂレウロコゴケ、ヒメサンカクゴケ、ミミカオリゴケ、ケタササゴケ、エフジヤウゴケ、ナガンタバエフジヨウゴケ、カビゴケ、コクサリゴケ、ウニバエフジヨウゴケ、トガリカタヒバモドキ、トサミノリゴケ、モーリツシンゲリゴケ、トサシゲリゴケ

ツノゴケ科

ニワツノゴケ、ミヤベツノゴケ、アナナシツゴケ

蘚類

ミヅゴケ科

コバノホソベリミヅゴケ、オオミヅゴケ、ウスアオミヅゴケ、アオオオミヅゴケ

ホウオウゴケ科

トサカホウオウゴケ、ヤマトホウオウゴケ、キヤラホクゴケ

キンシゴケ科

ヤネノウエノアゴケ、キンシゴケ

シツボゴケ科

シツボゴケ、キマトフデゴケ、カタシツボゴケ、シツボゴケ、オオシツボゴケ、タカサゴマイマイゴケ、チヂミパコブゴケ、コエノコブゴケ、フデゴケ、ナガダイゴケ

シラガゴケ科 オオシラガゴケ

センボンゴケ科

ツチノウエノタマゴケ、ミドリセンボンゴケ

ギボウシゴケ科

ギボウシゴケ、ケギボウシゴケ、ナガスナゴケ、スナゴケ、ミヤマスナゴケ、クロカワキゴケ

ヒヨウタンゴケ科 ヒヨウタンゴケ

ヨツバゴケ科 ヨツバゴケ

マゴケ科

シロゴケ、ハリガネゴケ、ケヘチマゴケ、オオサカゴケ

チヨウチンゴケ科

ツルチヨウチンゴケ、コバノチヨウチンゴケ、ウチヨウチンゴケ、コチヨウチンゴケ、コツボゴケ

ヒノキゴケ科

ヒノキゴケ、ハリヒノキゴケ

タマゴケ科

タマゴケ、ナガサワゴケ

ヒナノハイゴケ科

ヒメシハゴケ、ヒナノハイゴケ

チヂレゴケ科

サヤゴケ、ハチヂレゴケ、イシムウエノヒダゴケ

タチヒダゴケ科

ヒメミノゴケ、ミノゴケモミゴケ

ヒジキゴケ科 シロヒジキゴケ

ツルゴケ科 ツルゴケ

イタチゴケ科

リスゴケ、リスゴケモドキ、

ムジチゴケ科

マツムラゴケ、ホソムジナゴケ

ナワゴケ科

ナワゴケ、スダレゴケモドキ

ヒムロゴケ科 ヒムロゴケ

サガリゴケ科

タスキゴケ、ミズスギモドキ、サガリゴケ、ツリシタレゴケ、フトシダレゴケ、キノブイト

ゴケ、シノブイトゴケ、ハイヒモゴケ、オオハイヒモゴケ

ヒラゴケ科

キダチヒラゴケ、ヒメコクサゴケ、ミヤマヒラゴケ、エゾヒラゴケ、リボンゴケ、キツネノオゴケ、オオトラオノゴケ、

オトメゴケ科 ツガゴケ、アブラゴケ

ヒゲゴケ科 エダウロコゴケモドキ

シノブゴケ科

コバノキヌゴケ、ナカスジイトゴケ、コバノイトゴケ、イワイトゴケモドキ、イワイトゴケラセンゴケ、アオシノブゴケ、ヤマトシノブゴケ

セナギゴケ科

コガネハイゴケ、アオハイゴケ

アオキヌゴケ科

アオキヌゴケ、ネズミノオゴケ、ヒメナギゴケ、コカヤゴケ

ツヤゴケ科

ヒロハツヤゴケ、エタツヤゴケ、タチハイゴケ

サナタゴケ科 ミヤマサナタゴケ

ハツホソゴケ科 カガミゴケ

ハイゴケ科

クシノハゴケ、ツヤイチイゴケ、チリメンゴケ、ヒメハイゴケ、ハイゴケ、アカイイチイゴケ

フサゴケ科

ヒモハイゴケ、リウビゴケ、ヒメオカムラゴケ

イクビゴケ科 イクビゴケ

スギゴケ科

チヂレタチゴケ、ナミガタタチゴケ、カギバニワスギゴケ、ヘミズゴケ、オオスギゴケ

(羊歯植物)

ハナワラビ科

フユノハナワラビ、ハナヤスリ

コケシノブ科

ホソバコケシノブ、アオホラゴケ、ウチワゴケ、ハイホラゴケ

キジノオンダ科 キジノオンダ

ウラボシ科

トラノオンダ、チヤセンシダ、イヌワラビ、タニイヌワラビ、イワガネゼンマイ、シダ、ホシダ、オニヤブソテツ、ヤブソテツ、ミヤジマシダ、シノブ、シケツク、ホソバノイタチシダ、ナチクジャク、ベニシダ、クマワラビ、マルバベニシダ、サイコクベニシダ、カツモウイノデ、オクマワラビイタチシダ、イヌシダ、イワヒメワラビ、マメツクシダ、ヒメノキシノブ、エダウチホングウシダ、ピロウドツクシダ、イワガネツクシダ、タチシノブ、イ

メガン ソク、ゲジゲジシダ、ミツデウラボシ、イノデ、サカゲイノデ、ワラビ、オオバノ
イノモトソウ、マツギカンタ、アマタセシタ、イノモトソウ、ヒトツバホソバカナウラビ、
リヨウメツシダ、シンガンテ、ホラシノブ、ヒメハシゴシダ、ハシゴシダ、ハリガネウラビ
セワラシダ、シシラン、コモチシダ

ウラボシ科

コシダ、ウラボシ

カニクサ科

カニクサ

ゼンマイ科

ヤマドリゼンマイ、ゼンマイ、ヤンヤゼンマイ

トクサ科

スギナ、イヌスギナ

ヒカゲノカヅラ科

ミヅスギ、ヒカゲノカズラ、トウゲシバ

イワヒバ科

ヒメクラマゴケ、タチクラマゴケ、カタヒバ、クラマゴケ、イワヒバ

(種子植物)

(裸子植物)

イチイ科

カヤ

イヌガヤ科

イヌガヤ

モミ科

モミ、ツガ

マツ科

アカマツ、クロマツ

スギ科

スギ

コウヤマキ科

コウヤマキ

ヒノキ科

ヒノキ

イブキ科

ネズ

(被子植物)

(双子葉植物)

(古生花被類)

ハンゲシヨウ科

ドクダミ、ハンゲシヨウ

ヤナギ科

ハコヤナギ、ネコヤナギ、キツネヤナギ

ヤマモモ科

ヤマモモ

シラカシ科

ヒメヤシヤブシ、オオバヤシヤブシ、アカシデ、イヌシデ

ブナ科

アカカシ、アラカシ、シラカシ、ツクバネカシ、ウラボシカシ、ツリブカガシ、サバメカシ

コナラ、ツブラジヒ

ニレ科

ムクノキ、エノキ、ケヤキ

クワ科

クワグサ、イヌビワ、イタビカヅラ、オオイタビ

イラクサ科

ヤマミヅ、オニヤブマオ、ヤブマオ、メヤブマオ、コアカソイラクサ

ヤマモガシ科

ヤマモガシ

ビヤクタン科

カナビキソウ

ヤドリギ科

ヒメキハヤドリギ、マツクミ

カシアオイ科

サシエウアオイ

タデ科

サクラタデ、ヒメタデ、ヤナギタデ、イヌタデ、ホントクタデ、ヤブネグサ、ミヅソバ、マ

マコソシリスグイ、ミチヤナギ、イタドリ、スイバ、ヒメスイバ、ギンギン、ミズヒキ

アカサ科

ホソバノハマアカサ、シロザ、ハマハキギ、オカヒジキ、ハママツナ

ビロ科

イノゴツヂ、イヌユビ

ザクラボウ科

ザクロソウ

ツルナ科

ツルナ

スベリヒユ科

スベリヒユ

ナテシコ科

ノミノツツリ、ミミナクサ、ナンベンハコベ、ハマナテシコ、ツメクサ、ハコベ、ノミノアスマ

セグルマ科

ナガバヤマグルマ

ウマノアシガタ科

センニンソウ、オウレン、オキナグサ、ウマノアシガタ、タガツラ、キツネノボタン、ヒメウツ

アケビ科

アケビ、ミツバアケビ、ゴヨウアケビ、ムベ

メギ科

イカリソウ

ツツラフジ科

アオツツラフジ、ハスノハカヅラ

モクレン科

シキミ、サカネツラ、オガタモノキ、マツブサ、ウラジロマツブサ

クスノキ科

カゴノキ、クスノキ、ヤブニタケイ、ヤマカウバシ、クロモジ、アオガシ、タブノキ、イヌガシ、シロタモ、アブラチヤン

ケシ科

クサノオウ、タケニグサ

エンゴサ科

ムラサキケマン

アブラナ科

ハクセオ、ナジテ、タネツケバナ、イヌナヅナ、イヌガラシ

インモクソウ科

モウセンゴケ

ベンケイソウ科

コモチマンネンクサ、マルバマンネンクサ

ユキノシタ科

ネコノメソウ、ウツギ、マルバウツギ、コアシサイ、コガクウツギ、ノリウツギ、コンテリギ、(ガクウツギ) チャルメルソウ、ダイヤモンドソウ、ユキノシタ、ユキヤナギ、イワカラミ

トベラ科

トベラ

マンサク科

コウヤミツキ、イス

シモツケ科

ウラジロイワガサ (ミヤジマンモツケ)

オシロイ科

ザイフリボク、カナメモチ、カマツカ、オオカマツカ、アヅキナシ、ナンキンナナカマド、ウラジロノキ

ベラ科

キンミズヒキ、ヘビイチゴ、タイコンソウ、ヒメヘビイチゴ、カワラサイコ、キジムシロ、ミツバツチグリ、オヘビイチゴ、ツルキンバイ、ヤブイバラ、ノイバラ、ヤマイバラ、テリハノイバラ、フユイチゴ、クサイチゴ、ニガイチゴ、ナガバモミジイチゴ、オオフユイチゴ、ホウロクイチゴ

ササゲ科

クサササゲ、ヤマザクラ、リンボク

マメ科

クサネム、ネムノキ、ヤブマメ、ジヤケツイバラ、カワラケツメイ、ヌスビトハギ、コマツナギ、ヤハヅク、ハマエンドウ、ヤマハギ、メドハギ、マルバハギ、ネコハギ、ミヤコグサ、ケハネキイヌエンジュ、ウマゴヤシ、ナツアジ、タンキリマメ、クズ、クララ、スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、カマスダサ、ヤマフジ

フウロソウ科

ゲンノシヨウコ

カタバミ科

カタバミ、タチカタバミ

ヘンルウダ科

カラスザンショウ、コバノイヌザンショウ、コクサギ、ミヤマシギミ、サンショウ

ヒメハギ科

ヒメハギ

タカトウダイ科

エノキグサ、ニシキソウ、コニキソウ、ヒメユズリハ、ユズリハ、イワタイゲキ、タカトウダイ、カンコノキ、アカメガシラ、ヒメミカンソウ、コミカンソウ

ウルシ科

ツタウルシ、ヌルデ、ヘゼノキ、ヤマウルシ、モチノキ、タラエフ、アオハタ、タマミツキ、ナナメノキ、ソヨゴ、ウメモドキ、クロソヨゴ

ニシキギ科

ツルウメモドキ、コマユミ、ツルマサキ

ミツバウツギ科

ミツバウツギ

カエデ科

ウリカエデ、テツカエテ、ヤマモミジ、ミヤジマカエデ、ウリハダカエデ、コハウチカエデ

ムクロジ科

ムクロジ

クロウメモドキ科

タマヤナギ、イソノキ、ネコノチチ

ブドウ科

ノブドウ、ヤブガシラ、ツタ、サンカクヅル、アマヅル、エビヅル

シナノギ科

カラスノマゴ

サルナシ科

サルナシ、ウロジロマタタビ、マタタビ

ツバキ科

ヤブツバキ、ヒサカキ、サカキ、モクコク

オトギリソウ科

オトギリソウ、コケオトギリ、ミツオトギリ

スミレ科

タチツボスミレ、スミレ、コミヤマスミレ、コスミレ、ナガバノタチツボスミレ、ツボスミレ、シハイスマレ

イイギリ科

イイギリ、クスダイゲ

キブシ科

キブシ

チンチヨウゲ科

ガンビ

グミ科

アキグミ、ツルグミ、ナワシログミ

ミソハギ科

ミソハギ

アカバナ科

アカバナ

アリノトウグサ科

アリノトウグサ

ウコギ科

タロノキ、メダラ、キヅタ、カクレミノ

セリ科

ツボクサ、ハマゼリ、ハマボウフウ、ミヤマチドメ、オオバチドメ、ヒメチドメグサ、チドリメグサ、ヤブジラミ、オヤブジラミ

ミヅキ科

アオキ、クマノミヅキ、ヤマボフシ

(後 生 花 被 類)

リヨウブ科

リヨウブ

イチヤクソウ科

ウメガサソウ、ギンリヨウソウ、コギンリヨウソウ、イチヤクソウ

シヤクナゲ科

アケシバ、ネジキ、アセビ、ウスベニアセビ、ヤマツツジ、ダイセンミツバツツジ、コバノミツバツツジ、フジツツジ、シヤシヤンボ、ナツハセ、スノキ、ウスノキ

ヤブコウジ科

ヤブコウジ、マンリヨウ、イツセンリヨウ、タイミンタチバナ

サクラソウ科

ヌマトラノオ、コナスビ、ハマボツス

イソマツ科

ハマサジ

ガキノキ科

ヤマガキ、トキワガキ

ハヒノキ科

ミミズベヒ、クロキ、ハヒノキ、クロバヒ、カンザブドウノキ、サハフタギ

エゴノキ科

エゴノキ

モグセイ科

コバノトネリコ、ネズミモチ、イボタ

フジウツキ科

ホウライカヅラ

リンドウ科

フデリンドウ、アケボノソウ、センブリ、ツルリンドウ

キヨウチクトウ科

チヨノジソウ、サカキカヅラ、テイカカヅラ

カガイモ科

イヨカヅラ、コイケマ、キジョラン

ヒルガオ科

ヒルガオ、ハマヒルガオ

ネナンカヅラ科

ネナンカヅラ

ムラサキ科

オオルリソウ、ハナイバナ、ミズタビラコ、キウリグサ

クマツヅラ科

ムラサキシキブ、コバムラサキシキブ、ヤブムラサキ、トサムラサキ、クサギ、ハマクサギ、コバノヤブムラサキ、クマツヅラ、ハマガウ

オドリコソウ科

キランソウ、ジユウコヒトエ、ヤマハツカ、アキチヨウジ、クルマバナ、タフバナ、ヤマダフバナ、ナギナタコウジユ、ホトケノザ、メヘジキ、ヒメサルタヒコ、カキドオシ、ヒメジソ、イヌカウジユ、エゴマ、ウツボグサ、アキノタムラソウ、ナツノタムラソウ、タツナミソウ、シソバタツナミソウ、ピロウドナミキ (コバノタツナミソウ) ナミキソウ

ナス科

クコ、ヒヨドリジョウゴ、イヌホオズキ、ハダカホオズキ

ゴマノハグサ科

トキハハゼ、サギゴケ、ミヤマママコナ、ウリクサ、アゼトウカラシ、イヌノフグリ、カワジサ、ハマクリガタ、オオイヌノフグリ

タヌキモ科

ムラサキミミカキグサ、ミミカキグサ、タヌキモ、ホザキノミミカキグサ

キツネノマゴ科

キツネノマゴ

オオバコ科

オオバコ

アカネ科

アリドオシ、ヨツバムグラ、ヤマムグラ、ヤエムグラ、ツルアリドオシ、ヘクソカヅラ、コバノヘクソカヅラ、イナエリソウ、シラタマカヅラ、オギカヅラ

スイカヅラ科

ゴツタバナウツギ、ハマニワドウ、ウグイスカグラ、スイカヅラ、ヤマヒヨウタンボク、ガマズミ、テリハコバノガマズミ、コバノガマズミ、ミヤマガマズミ

オミチユウ科

オトコエシ、ノジツヤ

ウリ科

ゴキヅル、アマチヤズル、キカラスウリ

キキョウ科

ホタルブクロ、ツルニンジン、アゼムシロ、ヒナギキョウ

キク科

スマダイコン、キツコウハグマ、ヨモギ、カワラヨモギ、イヌヨモギ、ノコンギク、シラヤマギク、(ウラギク(ハマシオン)、センダングサ、ヤブタバコ、ガンクビソウ、ヒメガンクビソウ、トキンソウ、ノアザミ、タカサブロウ、ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、ヒヨドリバナ、サワヒヨドリ、チチコグサ、ハハコグサ、サンシチソウ、ニガナ、ハナニガナ、オオジシバリ、ハマニガナ、イワニガナ、ヨメナ、アキノノゲシ、ユケセンボンギク、コオニタビラコ、センボンヤリ、ツワブキ、ヤクシソウ、ハナヤクシソウ、コウヤバハキ、フキコウゾリナ、シウブソウ、コメナモミ、メナモミ、アキノキランソウ、ノゲシ、ヒメジシオン、シロバナタンポポ、オナモミ、オウダビラコ

(単子葉植物)

ヒルムシロ科

エビモ、リュウノヒゲモ、アマモ

トチカガミ科

ミヅオホバコ

タケ科

ホカメギク

イネ科

コヌカダサ、スズメノテツボウ、トダシバ、ダンチク、ヒメコバンソウ、スズメノチヤヒキ、ノガリヤス、チヨウセンガリヤス、ヒナザサ、オガルガヤ、ギヨウキシバ、アキメヒシハ、アブラススキ、ノビエ、オヒシハ、コゴメカゼクサ、カゼクサ、スズメガヤ、ニワホネリ、ナルコエビ、ナギナタガヤ、ウシケグサ、トボシガラ、ミノゴメ、ドジョウツナギ、チガヤ、チゴザサ、ハヒチゴザサ、カモノハシ、ササクサ、ササガヤ、アシボソ、ススキ、イトススキ、ネズミガヤ、コチヂミザサ、ヌカキビ、スズメノヒエ、チカラシバ、スズメノホウゼラ、ヒエガエリ、ハイヌメリ、ウシグサ、イヌアワ、キンエノコロ、エノコログサ、ムラサキエノコロ、ネズミノオ、メガルガヤ、カニツクリグサ、シバ

カヤツリグサ科

ハダガヤ、ナキリスゲ、カサスゲ、マスダサ、アオスゲ、コジユズスゲ、ガウソ、カンズゲ、コウボウシバ、シオクダ、タガネソウ、アゼスゲ、カワラスゲ、ヤワラスゲ、ヒトモトススキ、タマガヤツリ、コアゼガヤツリ、コゴメガヤツリ、シチタウイカヤツリグサ、オニガヤツリ、ハマスゲ、テンツキ、ヤマイ、シカクイ、ミヅガヤツリ、ヒメクダ、ヒンジガヤツリ、イガカヤツリ、アゼガヤツリ、カワラスガナ、イヌノハナヒゲ、フトイ、サンカクイ

テンナンショウ科

マムシソウ、アホテンナンショウ、ウラシマソウ、カラスビシヤク

ホシタケ科

イヌノヒゲ、イトイヌノヒゲ、クロホシクサ、ホシクサ、シロイヌノヒゲ

ツクシ科

イボクサ、ツユクサ

ミズアライ科

コナギ

イ科

ハナゼキシヨウ、イ、タチコウガイゼキシヨウ、ヨウガイゼキヨウ、ホソバノコウガイゼキ
シヨウ、アキイ、ハズノキリ、ママスズノヒメ

シロウソ科

シヨウジ、ウバカマ、ノギラン

ラン科

イワギボウシ、タウキボウシ

ネギ科

ノビル

ユリ科

アマテ、ウバユリ、ササユリ、コオニユリ

キキカゲソウ科

ハウチヤクソウ、アマドコロ

ヤブラン科

ヤブラン、ジヤノヒゲ

サルトリイバラ科

サルトリイバラ、シホデ

ヒガンバナ科

ハマオモト

ヤマノイモ科

ヤマノイモ、キクバドコロ、オニドコロ

アヤメ科

シヤガ

ラン科

ヒナラン、マメヅタラン、ムギラン、ギンラン、キンラン、ホクロ、セキコク、カキラン、
ベニカヤラン、ミヤマウツラ、ジガバチソウ、ヒメフタバラン、フウラン、オオバノトンボ
ソウ、ウチアラン、カヤラン、ネジバナ、クモラン

附記

本島フロラ中その数量に於いて稀少なるもの数種がある。カギカツラは公園地区内で、ウラジロイワガサ(ミヤジマンモツケ)は三倉岩屋附近で、共に数株を見るに過ぎない。トゲアイペゴケ、ホウライカツラ、ヤマモガシ、コウヤミヅキ、クスノキ、ヤシヤセンマイ等も亦その自生は局部的である。ビロウドシダとハマオモトとは以前は巖島町附近で容易に発見し得たのであるが、現在では島内の僅か数ヶ所に残存しているに過ぎず、後者は殆ど絶滅してしまつた。又オカタマノキとクヌギとは巖島町内に各々一本宛栽植せられているものが既にかなりの大木に達しているのは興味深い。尚本島では灌木や草木の若干種が特に矮形にして所謂島崎型を示す傾向の見られるのは一層興味深い。